

はじめに

ここに慶應義塾大学アート・センターの点検・評価報告書を提出いたします。

まず本報告書記載にあたり、ご指示いただいた書式をいくぶん変更したことをお断りし、ご了承をお願いします。変更の理由は、ご指示いただいた「大学基準協会」書式がそもそも学部・大学院などの教育・研究実態の点検・評価のためのもので、大学附属研究所としてのアート・センターの活動には合致しない書式と思われたからです。そこでアート・センターの事業活動のうち、年度企画催事、講座、セミナーなどは学内外の参加者を対象としたものゆえ、これらは指示された書式における「教育活動」的な内容と、またアーカイヴなどの事業は「研究活動」と読みかえて記載しました。

わが国における大学附属研究所の活動は今日、大きな転換期を迎えています。たんなる専門研究機関にとどまらず、従来の組織では実現できない領域横断的な活動、また社会と大学とを結ぶアウトリーチ、エクステンション的な活動を実現しうる機構に発展しているからです。アート・センターもそうした認識のもとに活動に取り組んでいます。つきましては、来年度からは本塾なりの「附属研究所／点検・評価書式」を作成いただくようお願い申し上げます。

書式や記載項目に変更を加えました第二の理由は、慶應義塾内の一組織として、今後の点検・評価の「方式」について改善を要望したいからでもあります。

そもそも点検・評価とは、たんなる査定や評定ではなく、組織の活動の効果的活性化をめざす手続き以外の何ものでもありません。とすれば、はじめに組織の主体的な取り組みがなければ活性化はありえないでしょう。わが国の「評価」の常識にしたがっても、評価作業とは、最初に当該組織が主体的に中期計画を策定することから始まります。ついで、その中期計画に即して最初の年度計画を作成し、予算の審議をへて第一年度の事業計画を決定し、事業を遂行します。その年度が終了した時点ではじめて年間の事業活動をふりかえり、反省的に自己点検し、評価を加え、その報告を外部評価に委ねる、という展開のはずです。つまり、「評価」作業では、最初の自己点検が成立するまでにはほぼ二年間を要する手続きが一般的ではないでしょうか。迂遠な過程にみえても、こうした展開があればこそ、組織は主体的な取り組みと改善を真摯に実践しうるのです。

今回の点検・評価報告書作成については、事前に慶應義塾点検・評価委員会にて十分な審議をされ、常識的な「評価」手続きも熟知のうえでのご指示と存じます。とはいえ、一組織として、中期計画や目標も設定されていないところにいきなり現状を点検・評価することは、組織長が一方的な評定をくだすような印象を組織の構成員に与えかねません。これでは、組織における活動改善への能動的な取り組みを疎外するといってもあながち誇張ではありません。今回の作業が「評価」ではなく、「認証」を目的とするためかもしれませんが、いずれにせよ、来年度以降は、組織が中期的な計画を主体的に作成し、その自己点検を反映しうるような点検・評価方式に改善していただきたいと願う次第です。

アート・センターはこれまでも中期計画、年度目標といった観点を重視し、月例の所内会議でもそれをふまえて個別事業を検討してきました。たまたまアート・センターは2004年度に、活動開始から数えて第11年目を迎えます。5年間を中期計画期間とみなせば、第三期中期計画期間に入るわけです。けっして中期計画策定という一般常識をよしとするわけではありませんが、

この2ヶ月間にアート・センターの所員と中期的な活動展望を話題にすることが多くありました。本報告書でも、これまでの5年間、そしてその最後の1年間としての2003年度の事業を振りかえって自己点検する、との姿勢を基本としております。

この点検・評価報告については、いただいた書式のもとでは、どのレベルで何をどのように評価しているのかが不明確になりがちゆえ、ポリシー（理念的目的）、プログラム（理念を実現する事業計画目標）、タスク（個別作業実施）の三水準を重視して報告書を編成し、記述を試みました。したがって指示された書式のローマ数字項目の題名を若干変更し、また順序を入れ替えた箇所があります。指示された書式で、I. II. は「A. アート・センターの中期計画とポリシー」とみなし、I. 理念・目的・中期計画、II. 研究教育組織の課題としました。III. からはプログラムとタスクとみなしましたが、大別して研究・教育活動の「事業活動」と事務部門の「事務運営」としました。そのうえで事業活動は指示された教育的側面と研究的側面との区別を遵守し、細分化しています。また事務運営については、内容順から XI.XIII.VI.XII.X.XV.IX. の配列としました。また最後に新たに、E. として自己点検の総括を加えました。

慶應義塾において、より良き点検・評価事業が展開されるよう期待しております。

A アート・センターの中期計画とポリシー

I 理念・目的・中期計画

慶應義塾大学アート・センターは、現代社会における文化的・芸術的感性の醸成と諸芸術活動の発展に寄与するために、諸学協同の立場から理論的追究ならびに実践的活動を行うことを目的としている。

とりわけ、慶應義塾大学の附属研究所としての役割と機能を認識し、時代の先端的価値観を開示する芸術活動に即して、まず専門的研究活動を行うことはいうまでもない。同時に、それにとどまらず、塾内一貫教育校から大学院までの塾生の文化的人間形成、人材育成のための教育活動を視野にいたした新しい事業を創出し、さらには現代的状況下で急務とされる大学と一般社会とのコミュニティ形成を目的とする事業を展開するものである。前者の事業では、大学内での制度に拘束されない領域横断的な活動を、また後者の事業では、大学から社会にむけてのアウトリーチもしくはエクステンションの実行としてアート・マネジメントに代表される事業を目指している。

アート・センターは1993年秋に設立されてから、月例の所内会議にもとづいて、年度計画を検討、立案、実行し、また上記の理念にふさわしい中期計画的な展望をつねに検討してきた。5年間の中期計画の目安とすれば、たとえば一例をあげると、第一期の1994年度から1998年度において検討してきた研究アーカイヴが第二期の1999年度から2003年度において土方巽、瀧口修造、イサム・ノグチ、油井正一の研究アーカイヴとして実現・整備されたことは、特筆すべき大きな成果であった。

アート・センターは、2004年からいわば第三期の中期計画期間を迎えることになる。今後の5年間の中期計画としては、従来の事業活動の柱というべき、1) 年次企画、2) 講座、3) アーカイヴ 4) 学外諸機関との協同プロジェクト、5) 研究会、6) 塾内美術品の調査・保存、7) 出版・成果発表・広報活動の七つの活動をより拡充し、内容を深めるべく策定にあたっている。本報告書の書式からみると、1) 2) は教育活動面、3) 4) 5) 6) 7) は研究活動面に関連する。ただし、この本報告においては、点検・評価の通常の方式に則って、第二期の中期計画を振り返りつつ、紙幅の制限もあるので主として平成15(2003)年度の活動をもとに自己点検する形式をとり、これからの5年間の中期計画については詳述しない。今後、第二期の活動の点検・評価の認識にもとづいて2004年度からの第三期中期計画をより具体的に策定することとしたい。

II 研究教育組織の課題

アート・センターの組織は、ポリシーの面からみると、既存の大学制度・附属研究所制度にもとづいて発想され、実現された点で、問題が少なくない。つまり、研究・教育活動をになう所員と、それを支援する事務組織という二つからなる体制である。人事面からみれば、慶應義塾の教員と、事務職員からなる体制である。

まず、所員の問題である。端的に言えば、アート・センターの活発な活動は、ただただ教員の無償のボランティア精神によって支えられているという現実である。アート・センターの活動は現在、所員16名(全員、各学部所属)、短期所員4名(全員、各学部所属)、訪問所員(学外の専門家14名)、キュレーター1名(アート・センター専任・特別研究助手)、そして事務職員4名(兼任1名、専任1名、嘱託2名)によって維持されている。一般に、学部・専攻や部門を本務とする教員がそれ以外の学内の入試事務・学生指導などの業務運営に協力することは当然とし

でも、本務の活動にちかい研究教育活動に参加要請をする場合、その時間的負担を考慮すれば、若干でも研究費ほかの助成・支給が不可欠であろう。だが、アート・センターの活動では、所員の研究を支援する助成金は皆無であるといつてよい。むしろ、たえず学外との交渉を必要とするアート・センターの事業では、多くの所員が個人的出費負担を強いられる現状である。

この問題は、慶應義塾における附属研究所の所員とは何か、というポリシー上の本質問題である。本項ではその指摘にとどめておくが、塾当局は少なくとも、学部会議が存在するように、まず附属研究所会議を組織し、事態を改善する契機とするように提案したい。たんなる待遇改善を主張しているのではない。大学における附属研究所のもつ今日的意義と機能を的確に認識し、学塾としてよりよい制度を確立してほしいとの意味である。

つぎに、キュレーターである。キュレーターとは、美術館学芸員を意味し、教員の担当する理論研究、歴史研究よりも実践研究というべき領域を専門とするので、事務職に接近している職位でもある。この専門的職位がアート・センターの開設時に規程に明示され、採用されたことは、従来の教員／職員という二分性を打破する重要な意味をもっていた。実際、キュレーターによってアート・センターの活動が進展していることは紛れもない。しかし、キュレーターは現在、有期契約特別研究助手であり、非常に不安定な身分でしかない。司書やキュレーター、あるいは現代におけるIT関連の専門職員など、今日の大学では、たんなる教員／職員という従来の二分法では対応しえない専門職員の雇用を検討しなければならない。人材活用策として有期契約の意義も認めうるが、組織問題として実情に適合した対応に取り組みたい。

キュレーターに関連して、アート・センターではアーカイヴ専門家の問題が重要である。アーカイヴについては、アート・センターは慶應義塾内においてブックレットほかで先導的な知見を提示してきたつもりである。アート・センターの運営する研究アーカイヴでは、資料の処理、学術的知見を備えた「アーキヴィスト」が必要不可欠な人材である。アーキヴィストといつても、キュレーターやIT技術者をも含み込むのが現状で、キュレーターのように国家資格ではないが、こうした専門家の育成、雇用の開発はまず大学が開拓すべきであろう。アート・センターでは、アーキヴィストを訪問所員として待遇し、そして外部資金の導入などで雇用に努力しているが、これとてまったく不安定な状況でしかない。時代状況に即した雇用や人事を柔軟に検討するシステムを当局に要請しつつ、改善を図りたい。

つぎに、事務職員である。兼任1名、専任1名、嘱託2名という体制は、アート・センターの現状では適当な配置であろう。上記のような所員の体制上、年次企画などでは専任1名と嘱託2名が全面的に業務を担当するからである。じつはここでも、研究教育の事業活動と、それを支援する事務運営とが重なりあい、事務職員がむしろ事業活動に参画し実行する新しい事態が認められる。これは、研究所の体制に関する現代的な局面とみなして差しつかえない。

アート・センターは中期的に、組織として業務面における能率の増進を図り、効果的な運営をめざしてゆきたい。また、危機管理や著作権、広義での知的財産など、組織として中期的な展望のもとに取り組むべき問題も少なくない。

B アート・センターの〈事業活動〉のプログラムとタスク

Ⅲ アート・センターの教育活動ほかのプログラムとタスク

この全学的点検・評価報告の書式に対応して、アート・センターの事業活動で、学生・生徒・卒業生・学外者が参加する形式のものは、一応、教育活動ほかのカテゴリーに入れておく。プログラムは、年次企画と講座の二つである。

1. 年次企画

アート・センターの年次企画は、アート・センターの理念に則し、芸術を通じて現代的な文化状況や感性的イメージの変容、人間の多様化する価値観、国際／地域性問題を追究する内容と、とくに具体的なプログラムとして諸芸術における領域横断的な視点を重視し、立案されている。また、所員が本務とする学部・専攻・部門では実現できない活動、すなわち附属研究所のみが実現しうる活動をめざしている。したがって、トランス・アートの身体表現、上演芸術、環境芸術などを主題とする方向をとり、開催にあたっては、ひろく一貫教育校、大学、学外に協力を要請している。

以下には2003年度の活動のみをタスクとして記載する。そのなかで、たとえば過去5年間の中期計画を通じて実施された「ランドゥーガ」は上記の目的を示すプログラムのひとつであろう。これは、佐藤氏を中心に打楽器系の簡単なリズムによって参加者全員が音響的共感の場を形成する興味深い試みである。第一期の中期計画期間から慶應義塾普通部、大学で、また第二期には港区立港陽中学校、同赤坂中学校、慶應義塾女子高で実施された。学内また地域的な連携を視野にいて、音楽的体験の可能性を追究する企画だが、ときに成功し、ときに不成功に終わることもあり、教育という場を前提としたときの青少年の感性の開放性と閉鎖性という問題を浮き彫りにした。その意味で貴重な体験と成果をわれわれにもたらした。

年間の企画は、領域横断性を重視するためにやや上演系に重点がおかれたかと思うが、言語、造形、音響、映像、身体表現と芸術メディアを全域的にカバーしており、バランスと特色を生かした適切な内容となった。一貫教育校の生徒、保護者から学生、教職員、社会人、他大学の専門研究者など、多様な参加者を確保しえたことも強調しておく。

以下の年次企画については、すべて担当所員が決められ、事務職員とともに、内容面でも運営面でも入念な準備をへて開催された。担当所員、司会者の名称は省略する。

1-1. 油井正一アーカイヴ開設記念「いまモダンジャズ」

4月26日(土) 15:00～17:00 三田 北館ホール

出演：佐藤允彦(ピアノ) 山口真文(サクソ) 横山裕(ベース)

アーカイヴ紹介：鷺見洋一(慶應義塾大学文学部教授) 朝木由香(アート・センター訪問所員)
村井丈美(アート・センター訪問所員)

1-2. 映画理論研究会

映画の／と時間 その6「『カリガリ博士』上映+レクチャー」

5月8日(火) 18:00～20:00 三田 北館ホール

講師：藤崎康(映画評論家)

1-3. 新入生歓迎行事 舞踏公演「野の婚礼—新しき友へ」

6月18日(水) 17:30～19:30 日吉 来往舎イベントテラス

出演：和栗由紀夫(舞踏家)+好善舎

1-4. レクチャー&パフォーマンス「京劇—その歌唱と身体表現」

7月18日(金) 18:00～20:00 北館ホール

講師：岡晴夫(慶應義塾大学文学部教授) 実演：袁英明(京劇女優)

1-5. 港区立赤坂中学校のランドウーガ

11月10日(月) 港区立赤坂中学校

指導:佐藤允彦(作曲家) 出演:和田啓(パーカッション) 富川賞子(パーカッション)

1-6. 映画理論研究会

映画の／と時間 その7「講演会 フリッツ・ラングの世界—表現主義とナチズムのかなたへ」

11月13日(木) 18:00~20:00 三田 北館ホール

講師:藤崎康(映画評論家) 橋本順一(慶應義塾大学商学部教授)

1-7. 瀧口修造生誕百年記念講演会「瀧口修造とオブジェの世界」

12月1日(月) 18:00~20:00 三田 北館ホール

講師:岡崎和郎(オブジェ作家)

1-8. シンポジウム「デジタル化時代におけるアート・ドキュメンテーションの展開」

12月20日(土) 13:30~17:30 三田 北館4階会議室

講師:八重樫純樹(静岡大学情報学部教授) 田窪直規(近畿大学短期大学部助教授) 鯨井秀伸(愛知県美術館主任学芸員) 松下鈞(元国立音楽大学図書館主任司書)

1-9. 「生命を寿ぐ——高校生の声の力」

1月20日(火) 18:00~20:00 於:三田 西校舎ホール

出演:慶應義塾志木高等学校生徒 進行:速水淳子(慶應義塾志木高等学校教諭)

2. 講座

アート・センターが他の学内の附属研究所が行っているように、学生の履修と単位認定を認める講座を開設することは、開設当初より要望され、検討してきた点である。第二期中期計画期間には、大学学部の授業を開講した。また2000年度には、(社)私的録音補償金管理協会からの助成も受けて、大学院レベルの「連続講座・アートをひらく——MBAケース・メソッドによるアート・マネジメント・エキスパート・セミナー」を開講している。学部の授業については、十分な教育効果をあげるために、一般の授業では採用できないワークショップ形式を積極的に採用するなど試みを新たにしたが、今後、再度開講する場合には、所員の努力ではカバーしきれない教育設備の拡充など、大学側との協議にもとづく慎重な取り組みが必要とされよう。大学院レベルの講座は、内容面できわめて高い評価を獲得しており、美山副所長の努力もあって大学の対社会的事業活動として異例な成功を実現している。

2-1. 学部講座

かつてアート・センターの持つ領域横断的アートへの関心にもとづいて、慶應義塾大学日吉国際センター設置科目の枠内で、所員・訪問所員による授業を行った経緯もある。また、三田では、2002年度から2年間にわたって文学部共通科目としてアート・センター主宰の「芸術と文明」を開講した。オムニバス形式にありがちな弊害を排除するために、鷺見洋一教授のコーディネートのもと、受講者を20名に限定して徹底した討論を実行した。舞踏家栗由紀夫氏のワークショップ参加もえるなど出色の内容となったが、多様な課題を学生が消化しえず、年度末に評価の対象となった受講者は半数程度となった。そうした経験から、2004年度は休講とし、再検討することとした。所員の過重負担といった問題点も未解決である。

2-2. エキスパート・セミナー（社会人講座）

「連続講座・アートをひらく——MBAケース・メソッドによるアート・マネジメント・エキスパート・セミナー」講座のプログラムは、アート・マネジメントを領域とし、現代社会の動きに対応した特色ある教育の実施を目的としている。いわば文学部共通科目のアート・マネジメント講座（DNP基金）の「アート・マネジメント」、「アート・プロデュース」を発展させた内容で、大学院レベルの講座である。所員である慶應義塾大学大学院経営管理研究科（慶應ビジネス・スクール）和田充夫教授の参加をえて、実際のタスクとして事例研究を中心に9回にわたるセミナーを開催する。2000年度より開講。その高度な内容で、受講者にはすでに専門職で著名な方々も多く、高度専門職業人養成コースとして高い評価をうけている授業内容である。

少人数の効果的な教育方法を採用している。アンケート、ヒアリングなど、自己点検に必要な手続きも入念に実施してきた。いずれでも受講者の満足度はきわめて高い。課題などを一定水準以上にクリアした受講者には、アート・センターより修了証を授与している。

連続講座《アートをひらく》2003年度

MBAケース・メソッドによるアート・マネジメント・エキスパート・セミナー

9月27日（土）～1月17日（土）全9回 14:40～17:50 三田 大学院校舎

講師：飯島健（新国立劇場運営財団営業部営業課長）、太田幸治（東京国際大学商学部非常勤講師）、川又啓子（京都産業大助教授）、笹井宏益（国立教育政策研究所統括研究官）、澁谷覚（新潟大学経済学部助教授）、清水嘉弘（前株式会社東急文化村代表取締役副社長・玉川大学客員教授）、美山良夫（慶應義塾大学文学部教授）、山根節（慶應義塾大学大学院経営管理研究科＜慶應ビジネススクール＞教授・公認会計士）、和田充夫（慶應義塾大学大学院経営管理研究科＜慶應ビジネススクール＞教授）

Ⅳ アート・センターの研究活動と研究体制のプログラムとタスク

アート・センターの研究活動は所員によって維持されているが、専任教員所員の研究業績についてはここでは省略し、アート・センターの活動のうちで、四つのプログラム、つまり、アーカイヴ、学外諸機関との協同プロジェクト、研究会、塾内美術品の調査・保存に即して記述する。このプログラムにおけるタスクとは、①収集・管理、②調査・研究の二つの領域にわたる。

1. アーカイヴ

アート・センターの研究アーカイヴのプログラムは、芸術家に関する諸資料を集成し、その資料検索のためのデータベース構築を目的としているが、とくに芸術的想像力の展開、作品制作のプロセスといった生成的時間性を解明しうるジェネティック・アーカイヴ・エンジン構築を追究している。たんなる資料分類モデルではなく、各アーカイヴ内の専門研究者が特定サブジェクト・インデックスを作成し、その芸術家の想像力に固有なメタファー的發展過程を把握するためのデータベースである。タスクとしては、資料のより充実した収集と管理、また芸術的想像力の能動的展開を解明するための調査・研究が目的となる。以下では、主に第二期中期計画期間の個別タスクの成果を記述する。

1-1. 土方巽アーカイヴ

「土方巽アーカイヴ」は、土方巽未亡人で舞踏家でもある元藤燐子氏のご支援を得て、舞踏家土方巽（1928-1986）および彼が創始した暗黒舞踏に関する資料が1998年4月より慶應義塾大学アート・センターに寄託されたことをうけスタートした。

①収集・管理では、以下のタスクを実行した。

1998年度に、上記の資料コーパスの中でもとくに1972年の公演《四季のための二十七晩》に関する資料に対象を絞り、データ入力およびデジタル化を進めた。

1999年度に、土方巽記念資料館（アスベスト館）より寄託された文献資料について、利用者の閲覧に供するためのドキュメンテーション、データ入力、そして情報検索のためのキーワード抽出を進めた。一部の映像資料について、著作権者の許諾を得て、本プロジェクトの技術編である理工学部遠山研究室において開発された「SSQLによるビデオクリップ生成システム」の素材として実験的に活用。

2000年度に、未整理のポスター、チラシ、パンフレットなどいわゆる「一過性資料（エフェメラ）」を中心とした資料整理に着手。土方巽に関するエフェメラ資料は、加納光於、田中一光、中西夏之、赤瀬川原平、横尾忠則などわが国の現代芸術を代表するアーティストが様々な形で制作に関わっている点で、美術史的にも興味深い作例が多数含まれている。これらの資料を網羅的に調査・整理・撮影・デジタル化し、土方巽アーカイヴのコンテンツを充実させた。

2001年度に、2001年10月1日、写真家中谷忠雄氏より約4000点の写真資料が寄託され、「中谷忠雄コレクション」として土方巽アーカイヴの研究に活用してゆくことになった。舞踏家小林嵯峨氏、中嶋夏氏、玉野黄市氏より、所有の「舞踏譜」が一部寄託された。『土方巽全集』所収のテキスト・デジタル化作業を実施。総ページ数800におよぶ全集の全テキストをパソコン入力し、校正作業を経て、アーカイヴ内での利用に限定して、閲覧サービスを開始した。

2002年度に、「中谷忠雄コレクション」のデジタル化。アスベスト館所蔵動画フィルム資料（8ミリ、16ミリほか）の整理。ORC成果報告会（2003年1月6日）において舞踏家・和栗由紀夫氏によるワークショップを企画・デジタル撮影。

2003年度には、2003年5月16日、写真家小野塚誠氏より約4800点の写真資料が寄託され、「小野塚誠コレクション」として土方巽アーカイヴの研究に活用してゆくことになった。山本萌氏より「舞踏ノート」寄託。和栗由紀夫氏より「私家版 舞踏譜」寄贈。大辻誠子氏より、故大辻清司氏撮影（1959年）の写真資料（紙焼き）10点が寄贈。「肉体のシュルレアリスム——土方巽抄展」（川崎市岡本太郎美術館）で展示された諸資料（「病める舞姫」モニター用映像CD、「肉体の叛乱」音楽入りビデオ等）を受入。「動きのアーカイヴ」のための映像記録撮影（和栗由紀夫・小林嵯峨による舞踏、解説）。土方巽愛蔵品（アスベスト館蔵）の撮影フィルム（ポジ・小野塚誠撮影）を受入。「肉体のシュルレアリスム——土方巽抄展」（川崎市岡本太郎美術館）の展示およびパフォーマンス撮影フィルム（ポジ・小野塚誠撮影）受入。アスベスト館より土方巽所蔵の書籍・雑誌を追加寄託される。「小野塚誠コレクション」のデジタル化。小林嵯峨氏所蔵「舞踏ノート」のデジタル化。中西夏之氏所蔵「舞台空間メモ」の撮影（ポジ・モノクロ）・デジタル化。自筆原稿資料（土方巽、三島由紀夫、瀧口修造、黛敏郎）の撮影。元藤燐子氏（アスベスト館館長）へのインタビュー取材実施、談話記録。

②調査・研究では、以下の成果をあげた。

1998年度に、前田富士男「『土方巽アーカイヴ』の開設」、『ARTLET』10、1998.8。石井達朗「『土方巽アーカイヴ』開設記念《四季のための二十七晩》をめぐって」、『ARTLET』11、1999.3。

1999年度に、前田富士男「新しいアーカイヴにむけて」、『ARTLET』12、1999.10。森下隆「資料館とアーカイヴと」、『ARTLET』12、1999.10。「第2回アート・ドキュメンテーション研究フ

フォーラム：美術情報の明日を考える」(1999年11月12日、国立西洋美術館、主催：アート・ドキュメンテーション研究会)の第3セッション「アート・アーカイヴとフィールドワーク」において、柳井康弘、内田まほろ、有澤達也が「アーカイヴの新たな方法論としての“ジェネティック・アーカイヴ・エンジン”」と題して研究発表。柳井康弘、内田まほろ、有澤達也「アーカイヴの新たな方法論としての“ジェネティック・アーカイヴ・エンジン”」、『第2回アート・ドキュメンテーション研究フォーラム：美術情報の明日を考える報告書』、2000、83-91頁。

2000年度に、森下隆「土方巽の舞踏創造の方法をめぐって：舞踏の本質と作舞におけるシュルレアリスムの思想と方法」、『ジェネティック・アーカイヴ・エンジン：デジタルの森で踊る土方巽 (BOOKLET 06)』、48 - 77頁。森下隆「土方巽の舞踏と<バラ色ダンス>」、『バラ色ダンスのイコノロジー：土方巽を再構築する』、6 - 8頁。柳井康弘「作品解説」、『バラ色ダンスのイコノロジー：土方巽を再構築する』、25 - 31頁。平成12年度科学研究費補助金 (COE形成基礎研究費) 研究報告書『バラ色ダンスのイコノロジー：土方巽を再構築する』を編集・発行。2000年12月上演作品とエフェメラ資料 (ポスター、チラシ、チケットなど) のデータを収録した『土方巽舞踏資料集 第1歩』を編集・発行。2000年12月4日～5日三田キャンパス東館で開催された「COE国際シンポジウム『創造的デジタルメディアは新世紀に何をもちたすか』」に、鷺見洋一と遠山元道が「文化とデジタルメディア」(12月4日午後3時半～5時)に参加し、報告と討論を行った。論文では、鷺見洋一「ジェネティック・アーカイヴ構築のための基本的歴史概観」、『ジェネティック・アーカイヴ・エンジン：デジタルの森で踊る土方巽 (BOOKLET 06)』、3 - 10頁。柳井康弘「土方巽アーカイヴ“ジェネティック・アーカイヴ・エンジン”におけるドキュメンテーションについて」、『ジェネティック・アーカイヴ・エンジン：デジタルの森で踊る土方巽 (BOOKLET 06)』、12 - 26頁。内田まほろ「土方巽デジタル・アーカイヴのデザイン理論」、『ジェネティック・アーカイヴ・エンジン：デジタルの森で踊る土方巽 (BOOKLET 06)』、27 - 37頁。遠山元道「空値とその始末：半構造の設計論」、『ジェネティック・アーカイヴ・エンジン：デジタルの森で踊る土方巽 (BOOKLET 06)』、38 - 45頁。前田富士男「アーカイヴと生成論 (Genetics)：“新しさ”と“似ていること”の解説にむけて」、『ジェネティック・アーカイヴ・エンジン：デジタルの森で踊る土方巽 (BOOKLET 06)』、80 - 95頁。鷺見洋一「ジェネティック・アーカイヴ・エンジンの中の土方巽」、『バラ色ダンスのイコノロジー：土方巽を再構築する』、4 - 5頁。前田富士男「芸術的制作行為の再構築：“土方巽アーカイヴ”と研究アーカイヴ・システム」、『バラ色ダンスのイコノロジー：土方巽を再構築する』、34 - 45頁。

2001年度に、小林嵯峨、中嶋夏、笠井叡の諸氏に協力いただき、それぞれ数回にわたって生前の土方巽および舞踏に関するインタビュー取材を実施。都内 (阿佐ヶ谷、中野、高輪) および秋田におけるロケーション取材を実施。村井丈美「中谷忠雄コレクション」、『ARTLET』17、2002.3。

2002年度に、村井丈美、「物質の起源へ：土方巽《舞踏譜》読解のひとつの試み」、『慶應義塾大学アート・センター年報』9、13-17頁。ORC成果報告会 (2003年1月6日)においてプレゼンテーション「土方巽アーカイヴについて」(村井)、「舞踏譜研究」(森下)。

2003年度に、DRM研究集会 (2003年10月27日、東館6階)において村井丈美「土方巽アーカイヴについて」と題するプレゼンテーション。「肉体のシュルレアリスム——土方巽抄展」(川崎市岡本太郎美術館)の図録『肉体のシュルレアリスム——土方巽抄』共同編集。村井丈美「肉体はいつ叛乱したか——「病氣」を通して見る、土方巽 暗黒舞踏の軌跡」、『芸術のロケーション (BOOKLET 12)』、93-100頁。森下隆「舞踏の形式について 序」、(森下)、『芸術のロケーション (BOOKLET 12)』、101-115頁。森下隆「追悼 元藤燐子さん：アスベスト館とともにあった」『ARTLET』21、2003.3。

1 - 2. 瀧口修造アーカイヴ

2001年3月に詩人・造形作家・評論家瀧口修造（1903-1979）のご遺族から、歴大な資料の寄贈をえて「瀧口修造アーカイヴ」を開設した。詩作、評論、造形などジャンルにとらわれない多彩な活動を展開した瀧口修造を反映し、そのコンテンツは実に幅広い。原稿、草稿、メモなどの文字資料から、デッサン、デカルコマニー、画稿などの美術資料、展覧会カタログ、パンフレット、チラシなどの一過性資料、その他写真、書簡、書類、日用品、図書、雑誌類などが本アーカイヴに含まれている。

①収集・管理では、以下のタスクを実行した。

2001年度に、瀧口自身が制作した手作り本、デッサン、デカルコマニー、水彩作品など約50点の美術作品について、調書作成と写真撮影を実施。また資料劣化を防ぐため、各作品の保存のため、中性紙を用いた専用のアーカイヴァル・ボックスやダブルマットを用意した。

2002年度に、瀧口修造による美術作品のうち、「スケッチブック」、「手作り本」の全ページ（約1000点）の調書作成と写真撮影。1950年前後から1980年前後にかけて瀧口が関わった、あるいは瀧口のもとに寄せられた国内外で開催された展覧会のカタログ、チラシ、ポスター、チケット、案内状、メモ用紙等を含む、総数1000点余におよぶ一過性資料の整理作業を実施。

2003年度に、旧・瀧口修造蔵書整理。データ入力。一過性資料のうち、50年代資料の柱である「タケミヤ画廊」、「実験工房」関係資料の画像スキャン、データ入力作業。書簡類の整理。造形作家山口勝弘氏へのインタビュー取材実施。瀧口修造の撮影による写真資料のデジタル化。瀧口の自筆草稿・メモ類の整理、データ入力。ならびに中性紙による保存実行。

②調査・研究では、以下の成果をあげた。

2002年度に、朝木由香「瀧口修造の「エクリチュール・オートマティック」をめぐる考察」、『慶應義塾大学アート・センター年報』9、18-23頁。ORC成果報告会（2003年1月6日）において、瀧口の1960年代の造形作品《デカルコマニー》について、本アーカイヴが理工学部遠山元道研究室と協同開発している「付箋システム」を用いて発表。

2003年度に、荻谷洋介「瀧口修造アーカイヴ所蔵のスタドレール画廊カタログ」、『慶應義塾大学アート・センター年報』10、22-27頁。

1-3. ノグチ・ルーム・アーカイヴ

ノグチ・ルーム・アーカイヴは、三田キャンパス内の第二研究室（谷口吉郎設計、1951年竣工）の談話室として計画され、イサム・ノグチがデザインを担当した「新萬來舎」（通称「ノグチ・ルーム」）とそれに付随する庭園と3点の彫刻作品を主題とした研究アーカイヴである。

①収集・管理では、以下のタスクを実行した。

1998年度に、文献資料としてノグチ・ルーム、イサム・ノグチ、谷口吉郎に関する新聞、雑誌記事を網羅的に収集。建物内外の写真を専門家によりカラーポジ、モノクロ紙焼きにより約60カット撮影し、デジタル化。そのうち何枚かは竣工当時の写真とまったく同じアングルでの撮影を依頼し、現状と竣工時の状態が比較できるよう工夫している。本塾工務課に保存されている竣工図面をデジタル化し、図面の名称を確認・整理した。ノグチ・ルーム内を360度撮影記録したデジタル・ヴァーチャル画像の制作。

2002年度に、夏以降、本アーカイヴに蓄積された資料を活用して第二研究室竣工時の関係者・識者へのインタビューが実施された。またゲストの方々から提供された貴重な写真や資料が新たにアーカイヴに加わるようになった。

②調査・研究では、以下の成果をあげた。

2002年度に、2003年1～2月、ニューヨークのイサム・ノグチ財団へ出張し資料収集（柳井）。また、ノグチ・ルーム内を360度撮影記録したデジタル・ヴァーチャル画像実写版の制作。

1-4. 油井正一アーカイヴ

慶應義塾大学出身のジャズ評論家・油井正一（1918 - 1998）の資料がご遺族より2003年4月慶應義塾大学アート・センターに寄贈されたことをうけ開設された。

①収集・管理では、以下のタスクを実行した。

2003年度に、資料約10000点を形態別に分類。および各々の概算点数を把握。内容は、書籍（図書517点、逐次刊行物335点、一過性資料約100点）、文字資料（ファイル約40点、原稿、メモ、ノートなど点数未把握）、その他（点数未把握）、音声資料（CD約6700点、LP・SP約800点、カセットテープ約650点、オープンリール4点）、映像資料（ビデオカセット約450点、フィルム[8mm, 16mm]約40点）、その他（書簡点数未把握、写真点数未把握、その他点数未把握）。諸資料の予備分類、登録、書誌データ入力を実施。

②調査・研究は開始したばかりで、佐藤允彦氏によるカセットテープの内容分析が進行中。

2. 学外諸機関との協同プロジェクト

大学が学外諸機関と協同のプロジェクトを展開することは、たんに研究助成の獲得という意味ではなく、開かれた大学と社会との関係構築という意味で、大学の担うべき大きな今日的な課題にはかならない。アート・センターは、このポリシーにもとづいて、多くのプログラムを開発してきた。以下の各項は、そのプログラムであり、第二期中期計画期間内の個別タスクを略述する。

今後ともこうした努力を続けるとともに、国内外の大学、研究所、美術館などと密接な協力体制をつくり、また地域や市民社会との交流を実現するようにプログラムとタスクを検討してゆきたい。

2-1. 地方自治体との協同事業

地方自治体や地域的共同体と大学との協同事業は、山形県、愛知県におけるアート・マネジメントの実践講座の開催として実行した。これは、美山所員を中心とするメンバーがアウトリーチとして山形県、愛知県に出講、指導する形式をとった。すでに山形県の受託事業は終了し、2001年度末に愛知県からの7年間におよぶ受託事業も終了し、現在はこうした大規模な受託事業はおこなわず、港区との協力関係などにとどめている。

地方自治体の受託事業では、県内文化事業担当者を対象にした優れた内容のアート・マネジメント講座を開催し、音楽会や演劇公演など、実際の企画、運営、上演を行うなど、多大な成果をあげ、慶應義塾大学の学外エクステンション活動として極めて高い評価を獲得した。

個別のタスクについては、アート・センター『年報』を参照してほしい。一例として、2001年度の「愛知県アート・マネジメント実践講座」をあげよう。ここでは、美山所員の主宰する年間5回のセミナー、14回に及ぶ実行委員会を開催し、企画公演「あったかい音 日本のおと」（長久手町文化の家・森ホール）を実現し、大成功を取めた。

2-2. 在日外国大使館文化部との協同事業

国際文化交流が重視される現代だが、大学のそれは多くの場合、研究・教育において特化されがちで、ひろく学生一般に還元されることが少ない。アート・センターはプログラムとして、ドイツ連邦共和国の東京ドイツ文化センター、英国のブリティッシュ・カウンシルなど、在日外国大使館文化部と継続的な協力関係を構築している。シンポジウムや公演会を開催し、その成果をブックレットにて公刊するなど、成果をあげている。第二期中期計画期間内では、1999年度にアート・マネジメント・セミナー「国際交流とアート・マネジメント——外国大使館文化部・文化機関の課題と今後」を諸文化部とともに、また2002年度に「身体をキャプチャーする——表現

主義舞踊の時代と今」をドイツ・英国両文化部と協力して開催したのをはじめ、多数の成果をあげることができた。

2-3. ORCほか

アート・センターは、1996年度から5年間にわたり文部省COEによる「創造的デジタルメディアの基板と応用に関する研究」(SFC主導)に、また現在はORC(私立大学オープン・リサーチ・センター)にアーカイヴ・プログラムをもって参画し、多くのタスクを達成してきた。また、セゾン文化財団の研究助成を受けるなど、学外からの事業支援を獲得し、収集・管理また調査・研究を発展させてきた。

3. 研究会

研究会は、アート・センターの基盤を形成する活動である。第二期中期計画期間中にも多数の研究会が一定の目的のもとに組織され、定期的な研究会を開催し、成果をあげて活動を終了した。研究会の開設と終了は、今後とも重要なプログラムとして機能する。研究会はまた、その成果を年次企画として大規模に公開する方式をとっている。過去5年間の期間には多様な研究会が組織されたが、以下では現在における研究会活動を記述する。

3-1. ADR研究会

この研究会は、アート・ドキュメンテーション、レジストレーションの問題を通じて、文化芸術の分類・保存等の理論化、実践課題の抽出を目指している。対象となるアート作品を一種の情報メディアとしてとらえ、これらの作品のひとつひとつを識別するために、どのように作品記述を行うかについての記録化、組織化についての研究である。情報記録物の記述においても標準化の必要性が明らかになり、博物館の世界におけるCRM(Conceptual Reference Model)や文書館の世界におけるISAD(International Standard of Archival Data)が注目されている。

2003年度には、公開シンポジウム「デジタル・アート・アーカイヴへの展開——資料記述をめぐって」を開催した。2003年12月20日(三田キャンパス・北館ホール)。講師は、八重樫純樹(静岡大学情報学部教授)、田窪直規(近畿大学短期大学部教授)、鯨井秀伸(愛知県美術館主任学芸員)、松下 鈞(元国立音楽大学附属図書館主任司書)。また高山所員主宰による研究会が2004年1月に開催。

3-2. アート・マネジメント教育研究会

アート・マネジメント教育の現状および問題点、課題の明確化をめざし、内外の研究者、アート・マネージャー、公益法人担当者を招いての研究会。カリキュラム・モデルの研究、作成を行う。2002/3年度は、連続講座「アートをひらく——アート・マネジメント・エキスパート・セミナー 2002」と連携して、大学院レベルのアート・マネジメント教育をいかに実現するか、その対象、方法、目的などを研究した。

3-3. トランス文化の位相研究会

現代芸術・芸能が文化の混成化に直面する過程で変化・非変化する局面に注目し、実際の担い手であるアーティストの典型的群像を選んで、文化を超えるトランス文化の位相であられる表現およびアイデンティティの諸問題を社会・文化的背景をおさえながら事例的に研究する。

2003年度は「変成意識と音楽」(ORC共催、12月18日、カリフォルニア大学サンディエゴ校ゴーギャン教授)、「立体映像によるパフォーマンス記録の試み」(ORC共催、2月20日、早稲

田大学国際情報通信研究センター柴田隆史助手)、「臨床的クロノトポス／即興性、野性性、身体と言葉」(ORC 共催、2月27日、熊本大学大学院医学薬学研究部下地明友助教授)を開催した。

3-4. 映画理論研究会

映画が死に絶えた後でも、映画という形式を想起させ、映画が持っていた美的経験の喚起力を伝えるに足る理論の構築を目指す研究会。2003年度は、年次企画として「カリガリ博士」(2003年5月8日、三田キャンパス 北館ホール)、講師：藤崎 康(映画評論家)、橋本順一(慶應義塾大学商学部教授)、また「フリッツ・ラングの世界——表現主義とナチズムのかなたへ」(2003年11月13日、三田キャンパス 北館ホール)、講師：藤崎 康(映画評論家)を開催した。

4. 塾所管作品調査・保存活動

アート・センターでは活動の一つとして、慶應義塾が所管する美術品の調査およびそれらの収蔵・修復・メンテナンスに関する助言や指導を行っている。2002年4月に発足した「慶應義塾美術品管理運用委員会」にアート・センター・キュレーターと所員が参加し、審議のうえ、修復処置の必要性が認定された美術品は、アート・センターを通じて専門家に作業を依頼する措置がとられている。

1998～2003年度に寄贈受入、修復・メンテナンス作業、展示などを行った所管美術品は以下のとおり。

1998年度

①山本鼎《澤木四方吉肖像》(三田メディアセンター)の修復。②和田英作《ステンドグラス原画》(三田メディアセンター)の修復。③「慶應義塾アート名作展」(1998年10月15日～21日、日吉キャンパス藤山記念館)の企画・運営。④木内克《人魚》の寄贈・設置。

1999年度

①須田寿《家鴨》(中等部)の修復。②北村四海《婦人胸像》(塾監局)の修復。③小山敬三《紅浅間有明月》(高等学校)の修復。④久保村誠司《木工宝石箱》の寄贈。⑤鎮目守治《慶應義塾図書館旧館》の寄贈。⑥大野広子《銀河Ⅲ》の寄贈。

2000年度

①猪熊弦一郎《圓い顔》(塾監局)の修復。②松村菊麿《福澤諭吉肖像》(塾監局)の修復。③頓宮隆輔《三田キャンパス東館》2点の寄贈。④猪熊弦一郎《圓い顔(A)》の寄贈。

2001年度

①朝倉文夫《平和来》(塾監局)の洗浄保存処置。②柴田佳石《福澤諭吉胸像》(塾監局)の洗浄保存処置。③菊池一雄《立像青年》(塾監局)の洗浄保存処置。④角南松生・近馬勘五《福澤諭吉肖像》(志木高)の修復。⑤矢崎千代二《福澤諭吉肖像》(塾監局)の修復。⑥仙波均平《裸婦》(塾監局)の修復。

2002年度

①毛利武彦《双騎図》(高等学校)の修復。②ジェニファー・バートレット《日本の海にて》(三田メディアセンター)の洗浄・修復。③多田良吉《福澤諭吉胸像》(三田メディアセンター)の修復。④作者不詳《福澤諭吉肖像》(塾監局)の修復。⑤千住博《大イチョウ》の寄贈。

2003年度

①鈴木善次郎《福澤諭吉肖像》(塾監局)の修復。②森芳雄《三田山上風景》(塾監局)の修復。③宇佐美圭司《やがて、すべてが一つの円の中に》(三田メディアセンター)の修復。⑤仙波均平《干魚》(普通部)の修復。⑥仙波均平《百合》(普通部)の修復。⑦山下品蔵《北アルプス》(普通部)の修復。⑧山下品蔵《風景》(普通部)の修復。⑨三宅悦隆《智(母の像)》の修復。

⑩作者不詳《福澤諭吉肖像》の寄贈。

5. 出版・成果発表・広報活動

5-1. BOOKLET（ブックレット）

『BOOKLET』は、アート・センターの刊行する研究紀要誌。研究論文5篇前後、また学術的な「文献リスト」、「資料」などを収録し、研究誌としての高い水準を維持するように編集委員会が努力している。各号とも、担当所員が編集委員長として企画・編集にあっている。アート・センター設立時から、外部への研究成果の発信としての本誌の役割も重視し、大学生協や一般書店店頭での販売も視野に置いて頒価を設定してきた。第二期中間計画期間において、アート・センターの努力がみのり、大学生協、ジュンク堂、ニューアートディフュージョン（NADIFF）、また京都のメディアショップなどにおいて着実に販売成果があがるようになり、6号、9号などは残部が僅少になっている。

1999年度

5号『ヨーゼフ・ボイス——ハイパーテキストとしての芸術』7篇収録。6号『ジェネティック・アーカイヴ・エンジン——デジタルの森で踊る土方巽——』5篇収録。

2000年度

7号『アート・アーカイヴズ／ドキュメンテーション——アート資料の宇宙——』5篇収録。8号『黒沢清——誘惑するシネマ——』4篇収録。

2001年度

9号『ソフィ・カル——歩行と芸術——』5篇収録。

2002年度

10号『身体をキャプチャーする——表現主義舞踏の系譜——』5篇収録。

2003年度

11号『芸術のプロジェクト』10篇収録。12号『芸術のロケーション』8篇収録。

5-2. 年報・アートレット

『年報』は、アート・センターの年間の活動を総覧するもので、創刊号から自己点検作業を視野に置いて、年次企画・講座・協同事業・研究会などの全活動を記録し、あわせて月例の所内会議の審議・報告事項も略述ながら記録する画期的形式を採用した。また、学外機関からの研究助成などに対応する成果発表の意味で、アーカイヴ作業などにおける論考、調査報告などを必ず掲載している。以下には、論考の本数のみ附記する。

『年報6号1998／99年度』論考1篇。

『年報7号1999／2000年度』論考1篇。

『年報8号2000／01年度』論考1篇。

『年報9号2001／02年度』論考3篇。

『年報10号2002／03年度』論考2篇。

『ARTLET』は、年間ほぼ2回刊行する8頁のアート・センター活動紹介紙。アート・センター設立時と異なり、デジタル・メディアが一般化した現在、編集方針に議論が加えられている。当面は、各号にトピック的な小特集（エッセイ3篇）をおき、書評・紹介記事、またアート・センター活動報告・予定を掲載する。たとえば、21号の小特集は「アートと手紙」とし、メールや絵手紙などに照明をあてた。編集事務、ダイレクトメール費用など負担もあるけれども、一過的なデジタル・メディア主流の状況のなかで、紙媒体によるアピールも重視してゆきたい。

1999年度『ARTLET 12』

2000年度『ARTLET 13』、『ARTLET 14』
2001年度『ARTLET 15』、『ARTLET 16』、『ARTLET 17』
2002年度『ARTLET 18』、『ARTLET 19』
2003年度『ARTLET 20』、『ARTLET 21』

5-3. 単行刊行物

アート・センターは研究所として、不定期に重要な研究成果を単行書として公刊している。たとえば、『土方巽[舞踏]資料集——第1歩』は、土方巽の作品総目録(カタログ・レゾネ)として重要な研究成果。予算的制約から特定の年次企画時に実現する他はないが、今後とも実現に向けて努力したい。とくに展覧会図録である『肉体のシュルレアリスム——土方巽抄』を慶應義塾大学出版会と共同にてCD添付の単行書として刊行した。展覧会図録を単行書として刊行する方式は、外国では一般化していてもわが国では稀で、とくに大学出版会が協力する形式としておそらく最初の試みとして重要な業績となった。

2000年度『土方巽[舞踏]資料集——第1歩』

〃 『<バラ色ダンス>のイコノロジー——土方巽を再構築する』(平成12年度科学研究費補助金<COE形成基礎研究費>研究報告書)

2003年度『肉体のシュルレアリスム——土方巽抄』、慶應義塾大学出版会との共同出版。

5-4. デジタル・メディアによる事業活動の記録・広報

アート・センターの事業活動全般については、ホームページによって広報活動を行っている。事業活動の記録・予定の網羅的掲載などについては、まだ欠落部分も認められ、改善すべき余地もあるけれども、おおむね満足すべき水準にある。

アート・センターの研究活動のなかで、アーカイヴはとくにデジタル・メディアと密接な関連を有している。現在、土方巽アーカイヴについては、インターネットによるデータ検索のサービスを実現している。これは、すでに土方巽の諸資料のデータベースとして、わが国にとどまらず、世界的にも高い評価をえている。ただし、当初のジェネティック・アーカイヴ・エンジンの中核をなすキーワード検索部分が未だ実現しておらず、クロノロジー的な検索しか行えない現状で、拡充を急がねばならない状況といえよう。

瀧口修造アーカイヴほかのアーカイヴでは、まず諸資料の整理に従事せざるをえず、データベースとしての運用にいたっていない。人員や予算の制約上、やむをえない事態だが、先行する土方巽アーカイヴをモデルに、データ検索のサービスを早い時期に実現したい。

インターネットにおける諸サービス提供については、要請が多い。とくにアーカイヴについても、そうした傾向が認められる。だが、諸外国の例を見ても、研究アーカイヴの諸資料には著作権ほか、公開に適さない種類の情報が多く、インターネットにおけるアクセスを実現していないのが一般的である。わが国には研究アーカイヴの歴史がないために、たんなる情報検索サービスの要請を無責任に研究アーカイヴに要求する傾向があると言わざるをえない。アメリカのポール・ゲティ財団ほかの研究アーカイヴにアクセスしてみれば、一目瞭然の事態なのだが、アーカイヴにおけるインターネット環境については、アート・センター内でも議論を慎重に積み重ね、研究機関としての対応を明確にしてゆく所存である。

V アート・センターの普及活動、ならびに受講者・訪問者受入れのプログラムとタスク

アート・センターは大学附属研究所だが、その事業活動において、学内の学生(一貫教育校の生徒を含む)、教職員、学外の研究者、一般人にひろく参加をよびかけることをポリシーとして

いる。具体的なプログラムとしては、チラシや『ARTLET』などのダイレクトメール／置き巻きの適正な運用、ホームページによる広報、学外諸機関へのパブリシティを実行している。

また、アート・センターはかねてより、年次企画などの参加者に出口アンケートを実施してきた。研究機関として、アンケート調査をベンチマーク的に評価する方式はとらないが、アンケートの内容については、月例の所内会議の活動報告時に必ず回覧し、参考にしている。参加者の構成（学生、教職員、学外など）や、広報活動のチェック、活動内容の理解、など参照に値する記述やデータも少なくないからである。

1. 年次企画

2003年度のアート・センターの年次企画における参加者数とアンケート回収率（％）を以下に記入する。2003年度の年次企画の参加者は、総計約2千名となる。

油井正一アーカイヴ開設記念「いまモダンジャズ」	参加者 310	回収率 59
4月26日（土）15:00～17:00 三田 北館ホール		
映画の／と時間6「『カリガリ博士』上映+レクチャー」	参加者 255	回収率 38
5月8日（火）18:00～20:00 三田 北館ホール		
新入生歓迎行事 舞踏公演「野の婚礼——新しき友へ」	参加者 344	回収率 23
6月18日（水）17:30～19:30 日吉 来往舎イベントテラス		
レクチャー&パフォーマンス「京劇—その歌唱と身体表現」	参加者 403	回収率 49
7月18日（金）18:00～20:00 三田 北館ホール		
港区立赤坂中学校のランドゥーガ	参加者 68	回収率 85
11月10日（月）港区立赤坂中学校		
映画の／と時間7「講演会 フリッツ・ラングの世界——表現主義とナチズムのかなたへ」		
11月13日（木）18:00～20:00 三田 北館ホール	参加者 175	回収率 53
瀧口修造生誕百年記念講演会「瀧口修造とオブジェの世界」	参加者 115	回収率 22
12月1日（月）18:00～20:00 三田 北館ホール		
シンポジウム「デジタル化時代におけるアート・ドキュメンテーションの展開」		
12月20日（土）13:30～17:30 三田 北館4階会議室	参加者 105	回収率 24.8
「生命を寿ぐ——高校生の声の力」	参加者 146	回収率 58
1月20日（火）18:00～20:00 三田 西校舎ホール		

2. 講座

2002年度から2年間にわたって文学部共通科目として開講したアート・センター主宰の「芸術と文明」は、授業形態ながら、受講者を20名に限定する方式を試みた。しかし課題の多様さなどから受講者は最終的に半減するなど、示唆深い結果となった。通常の授業形態とは異なった試みができるのもアート・センターの特性と認識し、今後とも可能な範囲で教育場面に意欲的に取り組んでゆきたい。

連続講座《アートをひらく》は社会人を主たる対象としており、受講者は公募形式を採用している。2002年度には67名の応募から24名を、2003年度には43名の応募から24名を決定した。受講者は72,000円の受講料を負担するが、それにもかかわらずこのような多数の応募がある事実は銘記しておきたい。

3. アーカイヴ

アーカイヴの普及活動は、展覧会の開催にいたる場面が少ないが、なによりもアーカイヴへの訪問者が重要であることは言うまでもない。土方巽アーカイヴには近年、外国からの複数の訪問者が長期的（土方研究のための慶應義塾大学留学）、また短期的に研究滞在している。この事態は、アーカイヴにとっては本質的に重要なことにほかならない。スローガンの国際交流ではなく、アート・センターのアーカイヴ部門で多くの外国人が机を並べて研究している状況こそ、真の国際的な学術交流の姿なのである。空間的制約から訪問者の同時的受入は最大4人程度だが、この枠を克服しなければならないのが、アート・センターの昨今の現実である。

以下は、アーカイヴ催事への参加者、アーカイヴ研究室への訪問者の状況である。

3-1. 土方巽アーカイヴ

1998年度 11月28日～12月15日、三田キャンパス北新館において、展覧会「土方巽アーカイヴ開設記念・四季のための二十七晩をめぐって」を企画・開催。これに関連して、元藤燐子、大野慶人による舞踏上演、映像とシンポジウム、舞踏ワークショップなどを開催。

1999年度 11月より、部分的にアーカイヴの一般利用を開始した。

2000年度 12月2日～8日、三田キャンパス東館ギャラリーにて展覧会「<バラ色ダンス>のイコノロジー——土方巽を再構築する——」を企画・開催。12月8日の「土方巽アーカイヴ出帆の集い」を機に、土方巽アーカイヴの一般公開を開始。

2001年度 アーカイヴ利用者数、124名。

2002年度 アーカイヴ利用者数、135名。

2003年度 文学部共通科目「芸術と文明」に於ける講義（9月26日、森下）。肉体のシュルレアリスム—土方巽抄展」（川崎市岡本太郎美術館）の企画協力。ラジオたんぱ「慶應義塾の時間」の連続講座「身体表現と文化」に協力・制作（森下）。慶應義塾大学出版会『土方巽と舞踏』制作・刊行に協力。また、有限会社Beatとの協力によりWEBサイトを制作・公開。『土方巽の舞踏世界：中谷忠雄写真集』（心泉社、2003）出版への協力。「肉体のシュルレアリスム—土方巽抄展」（川崎市岡本太郎美術館）への資料貸し出し。ドイツ ifa - Galerie (Stuttgart and Berlin) での“Tatsumi Hijikata”展への協力。アーカイヴ利用者数、176名。

3-2. 瀧口修造アーカイヴ

2001年度 富山県立近代美術館（7月19日～9月24日）と渋谷区立松濤美術館（12月4日～1月27日）で開催された「瀧口修造の造形的実験」展に協力し、本アーカイヴ所蔵の造形作品30点を出品した。両展の入場者数はきわめて多数。また2002年1月30日北館会議室2において、詩人・評論家の鶴岡善久氏を講師に瀧口研究者・関係者を対象とした研究講演会を開催。35名参加。所蔵資料のほとんどが未整理のため、資料の一般公開・閲覧サービスは実施せず。

2003年度 12月1日北館ホールにて「瀧口修造生誕100年記念講演『瀧口修造とオブジェの世界』（講師：岡崎和郎氏）を開催。参加者、160名余。ホール・ロビー内で一部資料の展示、ならびにスライド・ショー上映。平凡社より刊行予定『瀧口修造選集』（編集・土淵信彦氏）への資料提供・協力。富山チューリップ放送の瀧口修造特集番組への取材協力（美術作品3点撮影・協力）。

3-3. ノグチ・ルーム・アーカイヴ

2002年度 公開用ホームページ試作版が完成。

2003年度 ラジオたんぱ「慶應義塾の時間」において連続講座「谷口吉郎とイサム・ノグチ：慶應義塾の近代建築／モダンアート」を企画・制作（前田・柳井）。これにあわせて画像の一部をアート・センターHPにて公開。東京国立近代美術館で開催された「あかり」展に協力・資料提供。

3-4. 油井正一アーカイヴ

2003年度4月26日、三田キャンパス北館ホールにおいて、年次企画「いまモダンジャズ—油井正一アーカイヴ開設記念」を開催。公開はまだ行っていない。

4. 協同プロジェクト

外部諸機関との共同プロジェクトのなかでも、愛知県などの受託事業では、文化施設職員をはじめ、きわめて熱心が参加者が特徴的で、人数も多い。大学のアウトリーチとしてとくに重要視しなくてはならないプログラムである。行政次元のみならず地域的なコミュニティをめざす共同事業の試みはアート・センターとして拡充したい目標である。大学／学生という関係とは異なる大学／社会人、大学制度／地域性といった新しい関係づけのなかで参加者を受け入れる努力をつづけたい。

5. 研究会

研究会は、専門研究者を主体とする場面であり、こうした研究会への参加に制限はない。小規模な試みだが、研究所の本質的機能を担う場である。

6. 塾所管作品調査・保管

このプログラム自体としては広報などを必要としないが、慶應義塾の所管する優れた作品の紹介、展覧会、ヴァーチャル・ミュージアムなどのタスクは充実してゆかなくてはならない。

Ⅶ アート・センターの施設・設備

まず研究所としては、事務室・研究室ともに2004年3月に西別館に移転したばかりで、今のところ問題を提起するほどではない。しかし、2001年度から、キャンパス外のビルに立地している。このため、事務業務の環境は他部署との距離があり、時間的なロスが多い。また、これまで芝信用金庫ビル4階にて活動していた時期には、アーカイヴ資料が所蔵されているにもかかわらず、建物には警備員がおらず、セキュリティに問題があると思われた。現在の西別館は1階に警備員が常駐し、建物への入室、鍵の管理がおこなわれているが、これも今年度の運用とされており、次年度以降に懸念がある。

アート・センターは他部署に比較して、多様な形式で慶應義塾内のホールを使用しており、その回数も多い。整備不良、設備の老朽化など、ホールの改善に関しては課題が多く認められる。諸施設・設備の改善に際しては、必ずアート・センターにヒアリングを行っていただきたい。

アート・センターは美術資料のなかでも、きわめて重要な作品をも保管している。三田キャンパスでは、西館内に小規模な収蔵庫が設けられているが、空調・セキュリティなどは拙劣な状況である。アート・センターというよりも、管財課やメディアセンターの保管する重要品を含めて、美術品収蔵庫の改善を全学的な緊要な課題として指摘しておく。

1. 年次企画ほかの会場

アート・センターは年間10回ほど、多様な条件のもとで慶應義塾内のホールや空間を利用している。北館ホールはじめ、音響・視覚関連設備、ピアノなどの機器の管理に問題が多い。とくに北館ホールなど、東通によるオペレーションは、担当者の業務そのものは的確だが、主催者側のオペレーション委託料負担は高額である。改善を望みたい。

展覧会など、美術作品やコンピュータを使用するメディア・アート作品の展示・上演をする空間は、現在のところ、三田キャンパス内には皆無である。つまり、作品のセキュリティを念頭におき、照明設備など展示・閲覧を機能とする、鍵のかかる単純な意味での展示空間が欠如している。監視要員のアルバイト料すら高額に計上しなければならない現状は、アート・センターにとどまらず、21世紀COEの成果発表、あるいは福澤先生の記念展示さえ困難にしていると指摘せざるをえない。早急の対策をつよく要望する。

三田キャンパス内の教室空間は、教員1名による講義を前提としている形式が多く、ワークショップやスタジオなどの目的に即していない。また教壇周辺の機器装備も、講義のみを前提としていると考えざるをえない。アート・センターにかぎらず、通常の授業でも、講義形式でない新しい様態が模索されるべき局面であろう。この点も、緊急に改善を検討してほしい。

2. 研究活動空間

キュレーター、アーカイヴの担当者、訪問所員など常時、7名ほどが作業にあたっている。現在の西別館で、おおむね良好な空間状況にある。アート・センターの特色として、調査作業、撮影作業、修復検討作業などを行うことが多い。

3. アーカイヴ

作業空間、またアーカイヴ訪問者の閲覧空間は適当である。資料収蔵庫は、次項のⅧで記述するように、すでにほとんど余分の空間がなく、今後の資料の増加に対応しきれない懸念がある。また空調管理など、改善すべき課題も少なくない。

4. 事務運営空間

現在は常時4名が作業にあたっており、おおむね適当な空間といえる。ただし、所長のための空間はない。

Ⅷ アート・センターの図書資料・非図書資料・美術資料・学術情報・リポジトリ

アート・センターはその活動上、多数の資料、とくに美術資料や非図書資料などアーカイヴの特殊な資料を多く所管している。学内の他研究所と異なり、セキュリティや空調など、特別な環境上の配慮を必要とする。以下に現時点での統計を記す。

アーカイヴ関連の資料は、いずれも土方巽、瀧口修造、イサム・ノグチ、油井正一制作活動、批評活動を如実に伝える作品、一次資料であり、きわめて貴重な資料コーパスである。アーカイヴ訪問者の研究者には原則として、原資料ではなく、デジタル資料、複製資料を提供して閲覧してもらっている。専門研究者の希望など、キュレーターほかの判断にて、必然性がある場合には、

一次資料の閲覧を許可している。ただし、アーカイブ資料の特殊性として、私的側面があり、公開に応じられない場合も少なくない。つねに、ご遺族や関係者と協議のうえで判断を行ってゆく所存である。

アーカイブの一次資料のために、慶應義塾大学アート・センターに海外から留学生が滞在している。現今の制度では、附属研究所たるアート・センターは留学生の受入先となりえず、文学部にて対応しているが、こうした制度的問題も大学として中期的課題として検討すべきである。

アート・センター所蔵の図書資料は、センター内での閲覧にとどめて、センター外への貸し出しは行っていない。センターとしての図書資料 opac のようなデータベース化は未整備で、今後の課題として取り組みたい。

1. 図書資料

アート・センター活動関連として、図書約 1100 点（和書 870、洋書 240）。

土方巽アーカイブ関連は時点で図書 196 点、図書記事 589 点、雑誌 387 点、雑誌記事 766 点、新聞記事 288 点である。

瀧口修造アーカイブ関連は、図書 582 点、カタログ類 199 点、雑誌約 800 点。

ノグチ・ルーム・アーカイブ関連は、書籍類 45 点、カタログ類 24 点、雑誌・新聞記事 212 点。

油井正一アーカイブ関連は、図書 517 点、雑誌 335 点。

2. 非図書資料・美術資料

アート・センター活動関連として、外部パンフレット 3900 点、写真 5000 点、ビデオ・CD 等 1450 点。

土方巽アーカイブ関連は、写真資料約 20000 点、映像資料 210 点、音声資料 102 点、画稿類 529 点（舞踏ノート 16 点をふくむ）。

瀧口修造アーカイブ関連は、一過性資料（ポスター、パンフレット、チラシなど）1782 点、写真約 1500 点、音声資料 4 点、原稿・草稿類約 500 点、美術作品 83 点である。

ノグチ・ルーム・アーカイブ関連は、写真資料約 400 点、映像資料 5 点である。

油井正一アーカイブ関連は、一過性資料約 100 点、文字資料（ファイル約 40 点、原稿、メモ、ノートなど点数未把握、その他点数未把握）、音声資料（CD 約 6700 点、LP・SP 約 800 点、カセットテープ約 650 点、オープンリール 4 点）、映像資料（ビデオカセット約 450 点、フィルム（8mm、16mm）約 40 点）、その他（書簡点数未把握、写真点数未把握）である。

3. 学術情報・リポジトリ

アート・センターの資料のうち、土方巽アーカイブはインターネットにてデータの検索が可能である。他のアーカイブについても、そうした整備を進めたい。アート・センターの学術情報やリポジトリの拡充や整備、そして公開は、所管する一次資料の特殊性から慎重に実施しなければならないが、研究者の要請にもひろく応える意味で、個々のタスクを明確にしつつ前向きに取り組んでゆく計画である。

C アート・センターの〈事務運営〉のプログラムとタスク

XI アート・センターと学内管理運営

アート・センターではセンターの運営に関する事項、事業計画に関する事項、人事に関する事項、その他必要と認める事項について年2回開催する運営委員会において、議決している。所員の選出など、適切かつ公正に行われている。

業務上でとりわけ重要なのは、所内会議である。センターの事業活動、事務運営にかかわる事項を審議するため、運営委員会の下に所内会議を置き、8月を除き月1回開催し議決している。所員、事務職員による会議である。とくにアート・センターの事業活動、研究調査などについて、そのポリシー、プログラム、タスクを定例の所内会議にて毎回、綿密に審議したうえで、実行を承認、決定していることは、附属研究所の運営の適正性を確保する意味で、自己点検のなかでもその意義をつよく強調しておきたい。偏向した研究関心や特定学会との結びつきを回避することは、芸術研究にとって重要な姿勢だからである。意思決定プロセスの透明性は十分に確保されている。

アート・センターでは訪問所員として、学外の専門家、有識者が多数、事業に参加している。この点は重要で、日常的な連絡や会議、また年1回の運営会議後の会合にて、訪問所員がアート・センターの活動について貴重な指摘や助言をよせてくれている。

アート・センターは、アーカイヴ資料の運用を重要な業務としている関係から、個々のアーカイヴ関連で寄贈者、寄託者の方々、ならびにその関係者による運営検討会を随時開催している。遺産問題や私的問題など、多様な側面がある資料ゆえ、こうした会議は重要である。またご遺族、関係者の方々が慶應義塾大学を信頼しうるパートナーとして認知していただく意味でも、慎重な運営を心がけてきた。ご遺族、関係者の方々とときわめて良好な関係を維持しており、今後もそうした努力をつづけてゆきたい。

アート・センターは、年次企画、講座などで、学内の諸部署の協力をお願いすることが多い。所員にそもそも、慶應ビジネス・スクールの和田教授はじめ、日吉、矢上、湘南藤沢など諸キャンパスの教員がおり、多面的な支援をいただいている。催事では、管財課や学事センター、他キャンパスの関連部署の協力が不可欠で、これまでの豊かなアート・センターの成果もそうした協力の賜物にほかならない。今後とも、そうした協力関係を維持しうるように運営に留意したい。

2000年度の福澤諭吉没後百年を記念する「世紀をつらぬく福澤諭吉——没後100年記念」展では、福澤研究センター、メディアセンター、インフォメーションテクノロジーセンターなどと緊密な協力のもとで事業を行った。これは一例だが、学内の附属研究所との協力は、現代の大学が果たすべき社会的役割を展望するときに、非常に重要である。附属研究所は、もはや大学内の特化した領域の理論研究、歴史研究にとどまらず、学部や大学院の持ちえない、社会にむかって開かれた働きかけを担わなければならない。そう認識するとき、現状の学内における附属研究所をめぐる管理運営が非常におろそかにされていると言わざるをえない。附属研究所間の交流が通常は、皆無だからである。早急に、学内に、附属研究所連絡会議のようなシステムを実現するように、つよく要望する次第である。

これまで、研究所としてはかなり異例なアート・センターの活動がよく実現されえたのは、アート・センター開設以来の事務主任田邊、戸泉、本田氏の努力と支援を抜きにしては想像できない。後述するように事務主任が兼任である制度的問題は残るとしても、事務主任の努力のもとに所員の事業活動と職員の事務運営とが円滑に補完しあって機能してきた経緯は、ここに銘記して

おきたい。

アート・センターの危機管理体制については、美術品管理・セキュリティの側面からたえず論議をつづけているが、他の危機管理問題、全学的状況認識との整合性に関しては未だ不十分であろう。今後、より一層、認識と対応を深めてゆきたい。

Ⅳ アート・センターの事務組織

アート・センターには、専任職員1名、嘱託職員2名、常勤アルバイト1名が所属しており、事務主任は他部署と兼任者である。事務職員は次のような日常の業務を行っている。予算管理、会議運営、刊行物編集・販売・在庫管理、機器備品管理、図書資料・催事等記録物管理、催事企画運営事務。事務職員は、研究支援のみならず、年次企画などの事業活動を担当している点のアート・センターの特色となっている。

事務主任は兼任者であり、本務が別にあり同室していない。そのため、所属長の承認事項などにタイムラグが生じ、現場において問題がおきた時にも立ち会うことができない。業務運営上の助言が受けにくい状況である。

他の研究所についても言えるのだろうが、研究所相互の連携がなく、それぞれの運営状況もわからない。研究所間の事務関係の連絡も必要と思われる。

Ⅵ アート・センターの所員ほかの人的体制

アート・センター所長1名は、大学評議会の議を経て塾長が任命する。副所長1名は、所長の申請に基づき塾長が任命する。顧問は、所長の申請に基づき塾長が委嘱する。現在3名。所員は、所長の申請に基づき塾長が任命する。所員は文科系にとどまらず、その専門領域も多岐にわたっている。所属学部は文学部6名、経済学部2名、商学部2名、理工学部3名、環境情報学部1名、経営管理研究科1名、政策メディア研究科1名の合計16名。運営委員は各学部長の他に所長により様々な学部から任命されている。所員をのぞき14名。短期所員は学内専任教員のうち研究会の運営のみを行うものである。現在4名。訪問所員は学外からアート・センターの研究を支援・協力するものである。現在14名。他にアート資料の整理保存の専門家であるキュレーター1名が所属している。キュレーターはアート・センター内にとどまらず、慶應義塾全体の美術品の保存・修復関連の業務もおこなっている。

アート・センターの体制では、キュレーターの雇用が不安定と言わざるをえない。有期契約の特別研究助手の待遇だが、契約期間後の処遇については、人材の流動的活性化の視点も重視するが、全学的に統一された規則が適用されるべきとは思われない。専門的知見と技術を有する者としての有期契約キュレーターの雇用は、アート・センターの中期計画にとって重要な課題と認識している。

またアーカイヴ業務の中核を支えている訪問所員の待遇も、アート・センターの予算枠からではなく、学外資金や助成金を用いて可能になっている。現状では、中期的展望を欠いた待遇になりかねず、アート・センターの業務の展望に不安な影を投げかけている。訪問所員の活動を抜きにしたアーカイヴの運営はありえないと言ってよい。アーカイヴの入力作業などは専門的知見を欠いては実行不可能で、人材の流動性は重要な指標と必ずしもみなせない。アーカイヴの人的体制問題の核心的問題点である。

アーカイヴの所員、事務職員の活動に対する評価は、定性的な観点から評価方法を徐々に確立してゆきたい。所員の流動性は、研究所という特性上、必ずしも必要条件ではないが、個々の研究の活性度や、特権性の防止、人的交流などの観点から、プログラム、タスクに即して、配慮し

てゆく。

XII アート・センターの財政

1. 財政の充実度

アート・センターの活動は、通常予算の約2000万と、ほかにセンター外、学外からの共同研究費や助成によって支えられている。現在、アート・センターの中核のひとつであるアーカイヴ事業は、通常予算ではなく外部資金を基盤としているが、運営に多額の経費を必要とするこの事業は中長期の継続性を本質とする以上、財政基盤での裏付けをもたない点で、非常に大きな問題を認識せざるをえない。

アート・センターは、通常予算内では国際的なシンポジウムなどの年次企画を実施できないため、ドイツ、英国などの外国大使館文化部機関に協力を依頼し、招聘旅費などを負担してもらってきた。また、アート・センターはたえず外部の諸機関やアーティストと交渉を重ねて活動を維持している。こうした維持も、所員の個人的な経済的負担に支えられている部分が多い。中期計画におけるポリシー、プログラム、タスクを明示する用意があるので、それに即した財政の充実をお願いしたい。

2. 外部資金など

アート・センターの活動のなかでもアーカイヴ事業の財政基盤は、ほとんどの部分を外部資金に依存せざるをえない状況である。平成11年度の立ち上げ以来、COE、セゾン文化財団、慶應義塾大学大型研究助成など各方面からの支援をえるように努力をかさね、業務を展開してきたが、現在は文部科学省からの助成金 ORC と塾内新設の組織 DRM とに研究企画を提出して、助成金・共同研究費をえている。

アーカイヴ事業は、資料整理や学術情報の受信発信など中長期的なプログラムにもとづいて運営されている。そもそも財政基盤は、中長期的な事業計画には中長期的な基盤、短期的な事業活動には短期的な支援構成が対応しなければならない。学外からも高く評価されているアーカイヴ事業が中長期計画に対応した財政基盤をもたないことは、今後、解決すべき重要な課題である。

3. 予算執行・監査ほか

アート・センターの諸業務における予算の執行は、個別タスクごとに定例の所内会議にてそのつど予算を査定し、収支の報告を行っている。配分や執行のプロセスは透明性公開性をもっている。監査ほかについては、学内の他の研究所と同様な手続きと思われる。とくにアート・センターとして独自の方式を採用する必要は認めていない。

なお、アート・センターのアート・マネジメント講座は、受講料約7万円で毎年約20名強の受講者がいる。この講座の内容は社会人で専門家むけの高度な水準である。こうした水準を維持するためにアート・センターが多大な努力と支出を行っている事実は記しておきたい。

XIII アート・センターと学生生活への配慮

アート・センターの活動が学生への教育的側面をとくに重視していることは、述べるまでもない。学生生活という意味では、2002年度から日吉キャンパスにて教養研究センターと協力して

新入生歓迎行事を開催している。アート・センターの催事広報は各キャンパス内のポスター掲示、チラシの置き撒きを中心に実施し、また慶應義塾のホームページなどで学生に周知する広報を工夫している。

XV アート・センターと卒業生との関わり

卒業生向けの慶應義塾メールマガジン、慶應義塾のホームページに情報をのせている。催事の内容に応じて、卒業生の各同窓会組織へ広報している。また、慶應カードホルダーへの有料講座割引を行っている。

Ⅹ アート・センターの社会的連携・貢献

アート・センターにはおよそ 2500 名のメーリングリスト登録者がおり、催事のチラシ、年 2 回発行のニューズレターの送付をおこなっている。一般的な催事は基本的に自由に入場し、入場無料のものがほとんどである。メーリングについては費用負担もあるが、これまでの経験では、貢献度がたかい。学内ではアート・センターの活動は必ずしも認知されていないようだが、学外からの評価や反応はきわめて大きい。

D アート・センターの点検・評価

XIV アート・センターの自己点検・評価

すでに前文で述べたように、慶應義塾の附属研究所、センターは、学部・研究科とおよそ異なる事業活動、事務運営を行い、組織や制度も異なっている。もちろん、慶應義塾の評価・点検である以上、学内の全組織に共通して適用できる書式を用意すべきだが、それにしても「大学基準協会」の書式をすべての組織に転用する方式は無定見であろう。学塾としての慶應義塾の優れた全域的活動を網羅しうる書式を慶應義塾点検・評価委員会が準備すべきではないか。

もし、今回の点検・評価が「評価」ではなく「認証」を目的とするものなら、その旨を周知徹底して、複数ありうる認証機関のなかでも「大学基準協会」を選んだ理由を説明していただきたい。

自己点検・評価の方式が的確に確立されることが望ましい。アート・センターが提案するように、学内各組織の活動がまずポリシー／プログラム／タスクの水準で、そして、中期計画／年度計画として提示されるべきであろう。当然、予算の問題から活動実現に変化が生じるから、具体的な年度計画が予算審議後に決定され、年度計画が実行にうつされる。ついで、その年度計画が反省的に自己点検され、学内評価委員会、ひいては学外評価委員会でチェックされる経緯となろう。毎年の年度計画が点検・評価され、その中期計画期間が終了後に期間全体に関する総括がなされ、あらたな時期の中期計画が作成される、といった常識的な手続きをまず考慮し、そのうえで慶應義塾に適した方式を決めるべきである。

自己点検・評価がたんなる査定・評価に終わらないために、各組織の能動的な取り組みが不可欠であり、また学外者を含めて客観性や妥当性を確保すること、また学外へも結果を発信することは、今日では、あらためて求めるまでもない常識である。それよりも重視すべきは、結果ではなく、各組織の作成する中期計画の公表ではないか。実際、評価結果にさきだつて、まず中期計画が公表されること、これはすでに多くの国内の機関が実施していることだが、慶應義塾におい

ても重要な手続きとなるはずである。

各組織における中期計画の作成は、たんなる点検・評価にとどまらない重要な役割をもつにちがいない。なぜなら、慶應義塾においては教育・研究はじめ、多数のプロジェクトが同時進行的に実践されているはずだが、学塾としての組織間の情報交換がまことに乏しいからである。たとえば一貫教育校の幼稚舎や湘南藤沢校で教諭の方々が音楽教育でコンピュータを用いた独創的な実験をしていたと仮定しよう。おそらく、一貫教育校の相互間でも、こうした努力は情報として共有されないだろう。大学文学部の音楽学専攻あるいは教育学の教員が、そして理工学部の研究室やアート・センターのあるプログラムがそれに関連するとしても、現状では相互に協力しうる基盤が存在しない。学内の各組織における中期計画の作成と公表は、点検・評価とは別な次元で、学内に新しい共同研究や研究協力、教育実践を呼び覚ます契機となるにちがいない。

アート・センター、というよりも附属研究所、センターは、そうした共同作業を生み出す新しい場ともなりうるはずで、その意味でも学内諸組織における中期計画の作成は、学塾の改革としても重視してよいと思われる。

E 自己点検の総括

1. 総評

2003年度を5年間の中期計画期間（1999-2003年度）の終了時期とみなしつつ、アート・センターの活動を振り返ると、この5年間で、教育・学習の側面をもつ年次企画、講座、また、研究・調査の側面をもつアーカイヴ、学外諸機関との協同プロジェクト、研究会、塾内美術品の調査・保存、出版・成果発表・広報活動など、七つの活動領域が明確に機能をはたすようになり、それぞれの業務において、所員（キュレーター・訪問所員ほかを含む）と事務職員の協力により優れた成果をあげたと考える。

大学や学塾の附属研究所は今日、専門研究のみならず、大学と社会、あるいは学塾内の諸組織を結ぶ重要なエクステンション、アウトリーチの機能を果たすべき状況にあり、アート・センターはそうしたポリシーにもとづいて活動を展開していると認識する。もし、こうした認識が不当でないとすれば、慶應義塾の附属研究所やセンターなどが連絡・協議をする会議が定常的に運営されるべきであろう。こうした会議の設定を望む次第である。

2. 事業活動

事業活動とは、研究教育を目的とする活動の意味で、ポリシーにもとづく七つのプログラム領域、すなわち年次企画、講座、また、アーカイヴ、学外諸機関との協同プロジェクト、研究会、塾内美術品の調査・保存、出版・成果発表・広報活動にまたがる。アート・センターの2003年度の事業全体は、質的な次元でも量的規模の次元でもきわめて充実した水準を達成した。とくに年次企画は、国際性、時代の先端的感性、若い学生・生徒諸君のイマジネーションを先導する内容で、アート・マネジメント講座、アーカイヴ構築とともに、特筆すべき成果をあげたと考える。

しかし次期の中期計画、年度計画にあたって、今後改善を留意すべき点として、年次企画については領域横断性を重視しすぎて主題が偏らないようにより良いバランスを配慮すること、講座については学部授業の新たな試み、アーカイヴについては情報処理作業の改善、学外諸機関との共同プロジェクトについては地域的・社会的連帯、研究会については著作権・危機管理などの研究会をふくむ研究会全体の再編と新設そして内容充実、塾内美術品の調査・保存については感性

教育を視野にいれた能動的な取り組み、出版・成果発表・広報活動については学術情報発信の拡充を図りたい。

3. 事務運営

事務運営はふつう事業活動の支援を意味するけれども、アート・センターでは年次企画の実行などで事務職員が事業活動を担う重要な活動を行っており、通常の支援業務に加えて、附属研究所の所員／職員という従来の関係を打破する努力もなされている。その結果、研究所としての活動を円滑に実践する優れた運営が実現していると考えられる。

事務運営は、運営、人的体制、財務、施設にわけて考察できよう。まず運営全体は、所内会議を中核として効率的に、かつ透明性をもって行われている。ただし、研究所内の空間でアーカイヴ部門が研究・調査活動を継続的に展開しており、外国人を含む訪問者の対応、通常勤務時間外の資料調査作業など、管理面で整備を図りたい課題もある。研究所のセキュリティなども改善を試みたい。

人的体制は、おおむね適当な状況にあるが、事業活動の調査・研究作業を担当するキュレーターやアーキビストについて、人材活用と表裏一体の問題として、有期契約や職位、待遇などで不安定な要素が少なくない。アート・センターの活動を文字通り担っている組織の構成員ゆえ、体制として改善を図る必要がある。

財務については、全学的な状況をふまえて、たえず経費の削減と節約、より効率的な運用に腐心している。過去5年間においても、外部からの研究助成、共同研究費の獲得に努力し、成果をあげてきた。実際、開設時からの目的であったアート・センターの研究拠点というべきアーカイヴ事業を成立させるために、前所長鷺見洋一教授を中心に外部資金獲得の努力がなされ、拠点的事業が実現された。だが、こうした拠点的事業が成立し、優れた活動を展開しえた場合、塾当局は、そうした活動をまさに点検・評価したうえで、高規格にあると判断するのなら、不安定な外部資金に依存する状況を改善する措置をとっていただきたい。現在の日本社会の経済状況では外部資金の不安定性が顕著であり、確立した拠点的事業が解体しかねないからである。拠点的中長期事業と、企画的短中期事業との差異を認識し、財務的な判断を形成する措置をぜひとも要請したい。

施設では、アート・センターとしての事務・作業空間は、2003年度末に西別館に移転したことで、現在、良好な環境にある。今回の中期計画期間終了時には収蔵庫の狭隘化が生じるだろうが、三田キャンパス全体での収蔵庫問題として検討を始めていただきたい。三田キャンパスについては、アート・センターの要望というよりも教員全体の声を代表する意味で、学塾の中心的キャンパスにふさわしい研究成果発表や展示のための空間が皆無である事態を抜本的に改善されるよう、つよく要望する。

以 上